

ミミズ

澄川の森でクリ拾いで下ばかり見ている目に大きなミミズが落葉の上を滑るようにかなりのスピードで動いてクリの棘にぶつかり止まりました。その場面を撮影したのが右の写真です。



ミミズとは種名ではなく、ミミズ類の代表名で、このミミズの種名を調べましたが、よくわかりません。海水や淡水の水棲ミミズもあるので、世界には6,000種もいるとの記載もあります。ミミズの図鑑を探しましたが、見つかりませんでした。正式かどうかはわかりませんが、ヒメミミズ、シマミミズ、アカミミズ、サクラミミズ、ドバミミズ、シーボルトミミズ、などが目につきましたが、名と体が一致しません。筆者の認識ではこの写真のミミズはドバミミズなのです。少年時代の川釣りで使ったミミズは我が家の台所排水溝沿いをちょいと掘るといくらでも採れたミミズを使いましたが、その正式種名を気にしたこともありませんでした。

自然界で有機物を食べて分解してくれている貴重な存在であるばかりでなく、昆虫類からナメクジやカタツムリなど、動きの鈍い動物をも含む極めて多くの動物たちによって食べられていることから、食物連鎖の最弱者として多くの生物に貢献しているわけで、ありがたい生き物にちがいないと思います。

2016年10月17日、ホームマックによる幼稚園児たちのカミネッコン植樹の助っ人をしました。植え付け場の土を整えていたひとりの男児が「わー、水だらけだ!!」と叫びました。???,水ではなくミミズだらけと叫んだのでした。老化したわが耳の聞き違いでした。すると近くにいた女兒のひとりが「ミミズこわいよー」と怯みまして、あとじさりするのです。「ミミズは歯がないので、噛まれないうよ」と説明して手に取ってみせましたが、さらに怖がるばかりで、無駄でした。思い起こせばわが



息子も虫やイモリやカエルなどは大好きでしたが、ガガンボと足の長いクモをやたらと怖がる症状は大人になっても治まりません。この女兒もミミズ恐怖症を引きずって生きてゆくのかと、めんこくなった次第でありました。

澄川森林で子供たちの植樹会が定例化しつつあるのは嬉しいことですが、植える場所が少なくなっているので、何時まで続けられるかを心配しております。